

小学校体育科におけるセットスタートサッカーの展開

—プレー中に思考・判断し、表現する児童の育成—

高橋浩二（長崎大学人文社会科学域教育学系），宇野将武，橋田晶拓（長崎大学教育学部附属小学校），杠 友樹（対馬市立美津島北部小学校），久保田もか，峰松和夫（長崎大学人文社会科学域教育学系）

1. 序

本研究では、長崎大学教育学部附属小学校において平成 30 年度から令和 2 年度までの 3 年間に計画・実施された教育研究発表会に基づき、体育科の子ども像である「運動に没頭する子どもの育成」を目指した体育科授業を検討する。発表会における立場は、提案・授業者が宇野・橋田（附属小学校），指導助言が杠（長崎県教育庁体育保健課）・高橋（長崎大学）である。なお、この子ども像は「フロービークス」¹に基づいて考えられており、体育科ではフロービークスを生み出す学習を開することによって、能力や経験の差に関係なくすべての子どもが運動に没頭できるようになることを目指している²。この学習では子どもが中心となって思考・判断し、表現することによって、教材である運動に没頭していくことができるようになる。特に、小学校期では一つの対象物に多くの子どもが関わり、その対象を中心とした関係づくりを通じて、対象物に対する没頭から運動に対して没頭していくような位相の転換が重要である。その転換を実現するためには、いつ・どこで・何を学習し、どのように関連づけていくのかを明示すること（学習の系統性や学習内容の体系化）、学習のスタートやゴール及びその後の発展可能性を示すこと（学びの地図や羅針盤）が必要である³。

これまでに著者らは、小学校体育科及び中学校保健体育科における「学びの地図～運動編～」を構想し、小学校・中学校 9 年間の系統性を踏まえた指導内容の見直しのために「運動それ自体の特性」を中心においた学習内容の明確化を主張した⁴。また、ボール運動系（ゲーム及びボール運動）の学習から高まる運動能力の汎用性について検討し、学習者とボールとの関係の作り方、運動能力や非認知（的）能力の学習、カリキュラム・マネジメントによる指導（学習）内容の体系化の必要性について成果を得た⁵。さらに、運動観察能力の育成が小学校段階から必要であることが示された⁶。なお、本研究で考察対象とするボール運動系については、三輪（2013）が指摘するように、「多様な身体能力が求められるスポーツ」であるボールゲームは、「子どもの既習事項を把握し、学年・校種間の学習内容をしっかりとつなげることが不可欠である」⁷。本研究を通じて、この連関についても検討したい。

2. 小学校体育科におけるボールゲームの学習内容と系統性

文部科学省では、小学校学習指導要領(平成20年告示)解説(体育編)及び小学校学習指導要領(平成29年告示)解説(体育編)においてボール運動系の系統表を示している。表1は小学校学習指導要領(平成29年告示)解説(体育編)の領域別系統表から、著者らがボール運動系を抽出してまとめたものである。なお、本研究で考察対象となる中学年(第3・4学年)ゴール型ゲームでは、「攻守入り交じり」及び「陣地を取り合う」ゲームを行うことになっている。

ボール運動系の学習では、知識及び技能において「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」とに分けて学習内容を示している。その具体的な内容は型によって異なっているため、共通して学習する事柄は上の二つと言えよう。児童はこれらの知識及び技能を獲得しながら練習やゲームで活用する際に思考力・判断力・表現力等で示されている事柄を学習する。さらには、学びに向かう力・人間性等で示されている事柄を涵養していくことになる。その際、この三つをまとめるような学習方法を設定することが重要である。

表1. 小学校体育科におけるボール運動系の系統表⁸

(◇: ボール操作 ◆: ボールを持たないときの動き)

低学年		中学年	高学年
知識及び技能 ボールゲーム	◇ねらったところに緩やかにボールを転がす、投げる、蹴る、的に当てる、得点する ◆ボールが飛んだり、転がったりしてくるコースへの移動 ◆ボールを操作できる位置への移動	◇味方へのボールの手渡し、パス、シュート、ゴールへのボールの持ち込み ◆ボール保持時に体をボールに向ける ◆ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動	◇近くにいるフリーの味方へのパス ◇相手に取られない位置でのドリブル ◇パスを受けてのシュート ◆ボール保持者と自分の間に守備者が入らない位置への移動 ◆得点しやすい場所への移動 ◆ボール保持者とゴールの間に体を入れた守備
	◆空いている場所を見付けて、速く走ったり、急に曲がったり、身をかわしたりする ◆相手(鬼)のいない場所への移動、駆け込み ◆少人数で連携して相手(鬼)をかわしたり、走り抜けたりする ◆逃げる相手を追いかけタッチしたり、マーク(タグやフラッグ)を取ったりする		
表現力、判断力等	簡単な規則を工夫したり、攻め方を選んだりするとともに、考えたことを友達に伝える	規則を工夫したり、ゲームの型に応じた簡単な作戦を選んだりするとともに、考えたことを友達に伝える	ルールを工夫したり、自己やチームの特徴に応じた作戦を選んだりするとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝える
人間性等	•運動遊びに進んで取り組む •規則を守り誰とでも仲よく運動をする •勝敗を受け入れる •場や用具の安全に気を付ける	•運動に進んで取り組む •規則を守り誰とでも仲よく運動をする •勝敗を受け入れる •友達の考えを認める •場や用具の安全に気を付ける	•運動に積極的に取り組む •ルールを守り助け合って運動をする •勝敗を受け入れる •仲間の考え方や取組を認める •場や用具の安全に気を配る

3. 附属小学校体育科におけるセットスタートサッカーの指導（学習）内容

本授業は、第3学年の球技「ゴール型」に位置づき、単元7時間分の4時間目であった。児童はこれまでに「つなぎプレルボール」（1学期）や「フラッグフットボール」・「ハンドボール」（2学期）を学習し、相互承認や相互学習に努めてきた。また、ボールを持たないときの動きや簡単なボール操作といった技能向上についても学習が進んでいる。しかし、運動に苦手意識をもつ児童もいるため、場や運動を簡単にしたり、運動の特性を学習できる教材を工夫したりするなどして、すべての児童が運動を楽しみ、できる喜びを味わうよう取り組んでいる⁹。また、本授業では攻撃側が作戦を立てた後にボールをセットしてプレーを開始することによって、プレーの展開を分かりやすくした。それは攻撃側にとっても防御側にとってもプレー中にチーム内で思考・判断し、表現できるような場を設定したことにもなる。ここに低学年から中学年への連関を見出すことができる。

なお、本授業はタスクゲームを用いている¹⁰が、サッカーではスモールサイドゲームという用語がある。鈴木淳（2018）は、「2対2や、4対4、5対5などのように、ゲームよりも人数を減らし、ピッチサイズを小さくしたテーマを絞ったゲーム形式である。」と説明し、「ゲームに比べて、プレー回数と反復回数が多くなり、テーマ獲得に沿ったオーガナイズが可能になる。」と述べている¹¹。したがって、本授業はスモールサイドゲームを用いているとも言えよう。また、本単元ではアウトナンバーゲームを取り入れ、攻撃を主体にした学習を展開している。

表4は単元及び授業の概要、図1は本時のねらいと展開を示したものである。

表4. 単元「セットスタートサッカー」及び授業の概要

授業者：	宇野将武教諭
実施日：	令和3年2月5日（金）9:00～9:45
対象者：	第3学年3組 男子14名 女子14名
場所：	長崎大学教育学部附属小学校体育館
単元名：	セットスタートサッカー（ゴール型ゲーム）
単元の目標：	○基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、易しいゲームをすることができる。 ○規則を工夫したり、ゲームの型に応じた簡単な作戦を選んだりしているとともに、考えたことを友達に伝えることができる。 ○運動に進んで取り組もうとし、規則を守り誰とでも仲よく運動しようとしていたり、友達の考えを認めようとしていたりする。
単元の学習：	○サッカーは、ゴール型のゲームとして、攻守の入れ替えがあり、ゴールにボールを入れ、得点を競い合うことを楽しむゲームである。 本単元では、セットスタートとして攻守の切り替え場面を制限し、さらに攻撃側の人数が多くなるようにゲームを設定した。そうすることで、相手がいないところに動いたり、チームで協力して、空いている場所を生かした簡単な動きを考えたりしながらゲームを進めることができる

IV 本時の学習		課題	
題	子どもの取組	教師の関わり	備考
1 前時までの子どもの悪いやつれいを基に本時の学習課題を明らかにする。	○ 握り返しを行うと子どもたちは、「もつど点がどうりたい」「蹴る動きをやめたい」など前回「蹴る動きをやめたい」や「蹴る動きを考えてみるだらう。そこで、『蹴る動きを考えてもっと后をとりたい』という子どもの悪いやつれいを基にしめて、「もつど点をどうだめにしようか」という気持ちで動けばよいか」という本時の課題を確認部し、目当てで設定する。	○ これまで、ゲームのルールを理解しているかを見付けて動いているチームには移動する動きを伸ばす。リーマンの判断特性上、リーマンへの声を掛けたままを抱握する。次に、空いているチームには移動の声を掛けたままを抱握する。	25
2 展開	○ 前時までに本時の学習課題を明らかにする。	○ 前時までに本時の学習課題を見付けて動いている場所を基に、中央から攻め、空いている場所を基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	5
出会う	1 前時までの子どもの悪いやつれいを基に本時の学習課題を明らかにする。 2 前時までに本時の学習課題を見付けて動いている場所を基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	○ 「握り返しをするための動きを考えよう。もっと点をどうだめにしようか」という子どもの悪いやつれいを基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	1
追 究 す る	1 子どもの取組 2 前時までの子どもの悪いやつれいを基に本時の学習課題を明らかにする。 3 本時までに本時の学習課題を見付けて動いている場所を基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	【研究との関わり】 ○ これまでの子どもの悪いやつれいを基に、3ゴールゲームを行って攻めている。この中で、子どもたちは、自分たちが持つ「握り返し」や「蹴る」などの悪いやつれいを基に、3ゴールゲームを行って攻めている。この中で、子どもたちは、自分たちが持つ「握り返し」や「蹴る」などの悪いやつれいを基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	4 ステップタイム「3ゴールゲーム」を行う。
生 か す	1 子どもの取組 2 前時までの子どもの悪いやつれいを基に本時の学習課題を明らかにする。 3 本時までに本時の学習課題を見付けて動いている場所を基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	【研究との関わり】 ○ これまでの子どもの悪いやつれいを基に、3ゴールゲームを行って攻めている。この中で、子どもたちは、自分たちが持つ「握り返し」や「蹴る」などの悪いやつれいを基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	5 アップタイムでセットスタートサッカーに取り組む。
追 究 す る	1 子どもの取組 2 前時までの子どもの悪いやつれいを基に本時の学習課題を明らかにする。 3 本時までに本時の学習課題を見付けて動いている場所を基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	【研究との関わり】 ○ これまでの子どもの悪いやつれいを基に、3ゴールゲームを行って攻めている。この中で、子どもたちは、自分たちが持つ「握り返し」や「蹴る」などの悪いやつれいを基に、3ゴールゲームを行って攻めている。	6 学習を振り返る。

図 1. セットスタートサッカー（ゴール型ゲーム）のねらい及び展開

また、授業者の宇野は、ボールの硬さや重さによって児童の活動が阻害されないように、「フェルトボール」(図2、図3)を作成した。このボールに類似した「レジボール」がある¹²。作成方法は「レジボール」とほぼ同様だが、「フェルトボール」は、その表面に切頂二十面体型サッカーボールに模してフェルト生地を貼り付けた。このフェルト生地によってボールは滑りやすく転がりやすくなり、重みも増した。中身は新聞紙であるため軽量であり、クッション性が増した。一方で、衝撃に対して脆く、ボールの繋ぎ目が割けてしまうこともあった。



図2. 「フェルトボール」



図3. ボールの中身（新聞紙）

本单元及び授業の課題は次の通りである。一つ目は、本授業実践が研究発表会の都合により体育館での実施となったことである。本授業では、コートが体育館内のバスケットボールコートの半分しかとれなかつたため、ワンプレーやツープレーによる攻撃や防御が多く発生した。それは、児童がプレー中にチーム内で思考・判断し、表現する可能性を見出しながらも、コートの広さによってその発展を妨げたことになる。授業者、指導助言者共に、「グラウンドで実施したら、もっとプレーが続き、ゲームが面白くなつた」という見解で一致している。

次に、アウトナンバーゲームについてである。例えば、鈴木秀人(2017)が指摘しているように、「ボールゲームはどの種目でも、攻撃側と防御側が同数のイーブンナンバーで攻防する」ことを目指して計画されているため、アウトナンバーゲームを用いる授業では、作戦によって生み出すべき状態が最初から与えられ、その状態を生み出すために作戦を考える必要がない、という矛盾が生じることになる。彼が「問題は、このような矛盾について授業を計画し実践している教師自身がほとんど気づくことなく、授業の中で子どもたちに作戦を考えさせること自体が教師にとって目的化てしまっている」¹³と批判するように、教師による意図

の達成ではなく、学習者による意図の達成を通じた学習を展開する必要がある。

三つ目に、学習内容の体系化についてである。久保田ら(2018)は、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説(体育編)及び中学校学習指導要領(平成29年告示)解説(保健体育編)を参照し、ボール運動系の技能である「ボール操作」(小学校)や「用具の操作」(中学校)、「ボールを持たないときの動き」(小学校・中学校)やそのための具体的な動き(中学校)や「連携」(中学校)をまとめ¹⁴、それらが「ゴール型」の学習のみで高まる能力ではなく、ボール運動系において共通する学習内容であり、そのような能力を高める学習が重要であることについて主張している¹⁵。本単元や本授業の学習内容が、第4学年や高学年、中学校期にどのように繋がるのかについて明確に示す必要がある。

4. ボール運動系におけるゲームの捉え方

ボール運動系(特にゴール型)については、雑誌『体育科教育』において特集が複数回組まれ、授業計画(2013年2月号)¹⁶、ボールゲームの捉え方(2017年2月号)¹⁷、ゴール型ゲームの変化(2018年6月号)¹⁸、ボールゲームの学習内容(2020年11月号)¹⁹について検討されている。例えば鈴木理(2013)は、ゲームをオフィシャルゲームベースとローカルゲームベースに区別し、後者を推奨している。表2は、彼の論考及び表をまとめて著者らが表化したものである²⁰。

表2. オフィシャルゲームベースとローカルゲームベースの
区別からなる指導のベースと授業のデザイン

ベ一ス	オフィシャルゲームベース	ローカルゲームベース
ゴ一ルイメージ	各種目の専門的知識や技能をもった熟練者たちが行うようなゲーム	一定の同じ仕組みをもった制度の網で掬いとることが可能
立場	教師・専門家	子ども・学習者
構造	各種目	共通のゲーム構造
ゲームのありよう	「レベル」の高低	一つの名前のゲームがさまざまな姿で現れる「バージョン」
ゲームの方向性	・オフィシャルゲームを頂点とした低レベルから高レベル ・レベルアップ	・ゲームの当事者を中心置いていた「いま・ここ」のゲーム ・「バージョンアップ」
目標	ゲームのレベルを高め、「フルゲーム」に近づくこと	学習者の主体的条件に適合した「私たちのゲーム」
内容	ゲーム中の正しい判断や動き方を習得すること	実際のゲームで直面する競争課題を見きわめ、解決を図ること
方法	修正されたゲーム(Ex. ドリルゲームやタスクゲーム)	チーム内ゲーム(スクリメージ)
授業計画の適否の判断	目標への到達(達成)度	ゲームの「傾向」と「対策」の適合性

一方で、坂井(2019)は競技規則を前提としたゲームの構造を検討している。彼あは、共通した球技の競争目的を「得点を競い合う」と規定し、「得点をとる」攻撃と「得点を阻止する」防御を区別し、次のように類型化している。表3は、坂井によって作成された表2-1を著者らが一部抽出したものである²¹。

表3. 球技（ゴール型）における競争目的、競争課題、攻撃行動および防御行動

代表種目	サッカー、バスケットボール、水球、ラグビーなど
攻防の対峙の方法	攻撃と防御が入り乱れて対峙
攻防の区別	明確
攻防の交代	ボール所有で交代
勝敗決定方法	規定時間終了時の累積得点
競争目的	得点を競い合う（得点をとる・得点を阻止する）
競争課題	[攻撃]相手ゴールへボールを入れる（運ぶ）/[防御]自ゴールへボールを入れさせない（運ばせない）
攻撃行動	[ボール保持者] シュート、パス、ドリブル [ボール非保持者] スクリーン、カット（ランニング）、スペーシング、（ニュートラルボールの確保）
防御行動	ブロックショット、ステイール、インターセプト、ティクチャージ、（ニュートラルボールの確保）

他方で、ボールゲームを身体運動として捉えた山本(2020)は、ゴール型やネット型を想定したボールゲームについて、「ボールゲームは身体運動によるボールを介した集団内と集団間のコミュニケーションのゲーム」であり、「ボールゲームとはボールという飛び道具によって動的に変化する環境に、みんなと場を共有し、自らの身体運動によって柔軟に対応し、相手ゴールへボールを運ぶゲームである」と説明している。さらに彼は、ボールゲームで必要とされる身体技法を対人運動技能と位置づけ、ボールを投げる・蹴るといった個人運動技能と比較しながらその獲得方法を二つ示している。それは「他者への関心・注意、意図の共有」と「状況判断と運動パターンの切り替え」である²²。

以上のように、ボール運動系ではゲームをどのように捉えるかによって、授業の教授方法や児童の学習内容が大きく変わることになる。学校や体育科の目標に基づき、校種や学年に沿った教材を選択し、学年間の連関を深めていく必要がある。

5. 結及び今後の課題

本研究では、長崎大学教育学部附属小学校において平成30年から令和2年度までの3年間に計画・実施された教育研究発表会に基づき、体育科の子ども像である「運動に没頭する子どもの育成」を目指した体育科授業を検討した。その結果は次のようにまとめることができる。

小学校体育科におけるボールゲームでは、型によって異なる知識及び技能をそれぞれ学習することも大切だが、三つの型に共通した「ボール操作」と「ボール

を持たないときの動き」として学習し、他の型へ活用することが重要である。

附属小学校におけるセットスタートサッカーでは、プレー中に思考・判断し、表現するための工夫がなされている。それは、ボールをセットしてからプレーを開始することである。この学習では、児童の学習状況に応じてコートの広さを考慮する必要がある。

ボール運動系ではゲームの捉え方が多様である。どれか一つに統一するのではなく、学校や体育科の目標に基づき、校種や学年に沿った教材を選択して学年間の連関を深めていく必要がある。

今後は、附属小学校において展開した「ステップ・アップ学習」を検討し、学校教育において求められている資質・能力の三つの柱の育成を可能にする学習方法を提示したい。

付記. 本研究の一部は、長崎大学教育学部令和2年度研究企画推進委員会プロジェクト（学部長裁量経費）『体育科・保健体育科における「教科の力」を身に付けた教員養成プログラムの構築とWeb会議ツールの積極的活用』の助成を受けて行われた。

【引用および注】

- 1 この「フロービーク」は、次のように説明されている。「正さねばならない無秩序や防ぐべき自己への脅迫もないで、注意が自由に個人の目標達成のために投射されている状態である」。なお、この体験はいわゆる「夢中」とは異なり、「しばしば大きな身体的努力、または高度に訓練された知的活動を必要とする。それは熟練した能力が発揮されなくては生じない」。M.チクセントミハイ:今村浩明訳(1996)フロービーク 喜びの現象学.世界思想社, p. 51, p. 69.
- 2 橋田晶拓・宇野将武(2019)体育科 子ども像 運動に没頭する子どもの育成.長崎大学教育学部附属小学校平成30年度教育研究発表会研究紀要(1年次), pp. 72-78.
- 3 OECD. The Future of Education and Skills Education 2030. OECD Education 2030 プロジェクトについて (文部科学省初等中等教育局教育課程教育課程企画室) .https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf
- 4 久保田もか,他(2018)体育科・保健体育科における「学びの地図～運動編～」の構想.長崎大学教育学部紀要, 4:147-154.
- 5 久保田もか,他(2019)「ボール運動系」の学習から高まる運動能力の汎用性.長崎大学教育学部実践研究紀要, 18:13-19.
- 6 久保田もか,他(2021)体育科・保健体育科における運動観察能力のポイント化の必要性.長崎大学教育学部紀要, 7:41-48.
- 7 三輪佳見(2013)つながりのあるゴール型ゲームの指導体系の構築をめぐって.体育科教育, 61(2), pp. 18-21.
- 8 文部科学省(2017a)小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編.東洋館出版社, p. 178, p. 182, p. 184.
- 9 詳細については、以下を参照されたい.長崎大学教育学部附属小学校(2021a)令和2年度教育研究発表会研究紀要(3年次), pp. 76-82.長崎大学教育学部附属小学校(2021b)令和2年度教育研究発表会学習指導案集, pp. 45-48.なお、体育授業プログ

ラム作成委員会によって作成された『運動が苦手な子供も楽しめる体育授業プログラム案』が長崎県教育庁体育保健課の web ページに公開されている。

<https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2020/03/1585026224.pdf>

- 10 ドリルゲームとは、個人の技能向上を目指して繰り返し行うゲーム化した練習のことである。タスクゲームとは、技術的・戦術的学习課題が明確で、その課題が目的的に学習されるゲームのことである。齋藤勝史・鬼澤陽子(2006)ゲームに生きる「タスクゲーム」とその扱い方. 体育科教育, 54(6):32-35.
- 11 鈴木 淳. 第3章サッカーのコーチング 3. コーチングの方法, p. 101. 中山雅雄編著(2018)理論と実践で学ぶサッカーコーチング. 大修館書店.
- 12 森本 淳・日野克博(2017)「レジボール」で豊富なボール操作の経験を. 体育科教育, 65(2), pp. 43-47.
- 13 鈴木秀人(2017)ボールゲームの授業とアクティブ・ラーニングを考える. 体育科教育, 65(2):pp. 22-25, p. 23.
- 14 文部科学省(2017a)前掲書, p. 31. 文部科学省(2017b)中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 保健体育編. 東山書房, pp. 123-126, pp. 131-134.
- 15 久保田ら(2018)前掲著.
- 16 特集 ゴール型ゲームの授業計画. 体育科教育, 61(2), pp. 10-41.
- 17 特集 新しい学習指導要領とこれからのボールゲーム. 体育科教育, 65(2), pp. 12-55.
- 18 特集 新学習指導要領でゴール型ゲームはこう変わる. 体育科教育, 66(6), pp. 12-55.
- 19 特集 いま、ボールゲームで何をする?. 体育科教育, 68(11), pp. 12-55.
- 20 以下の内容及び表1を参考に、著者が作成した. 鈴木 理(2013)子どもの視点から出発するゴール型ゲームと授業計画. 体育科教育, 61(2), pp. 10-13.
- 21 坂井和明. 第2章 球技におけるゲームの特徴, p. 29. 日本コーチング学会編(2019)球技のコーチング学. 大修館書店.
- 22 山本裕二(2020)身体運動としてのボールゲーム. 体育科教育, 68(11), pp. 12-15.